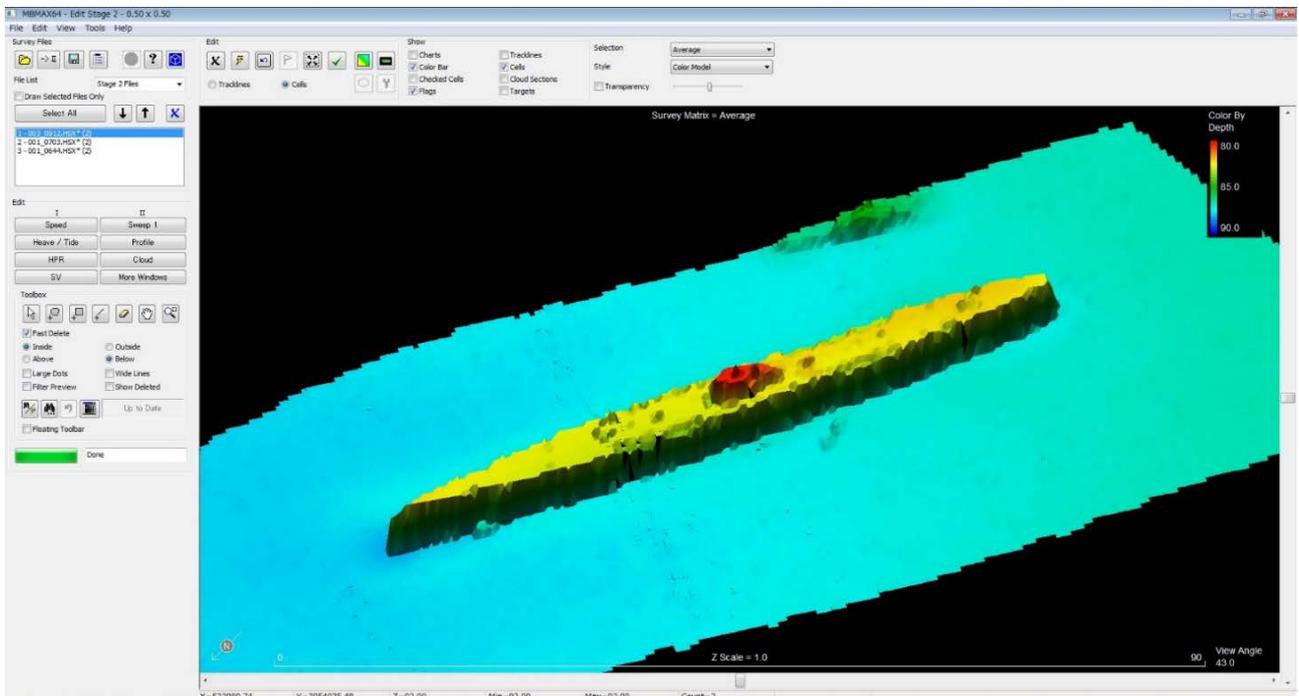


2018年7月10日  
株式会社東陽テクニカ

**若狭湾沖 水深約 90m の海底で、旧日本海軍潜水艦の発見に貢献**  
**～マルチビーム測深機「Sonic2024」を使い、**  
**沈没潜水艦の 3D 画像を取得～**

株式会社東陽テクニカ（本社：東京都中央区、代表取締役社長：五味 勝）は、一般社団法人ラ・プロンジェ深海工学会（代表理事 浦 環・九州工業大学特別教授）による、第二次世界大戦後海没処分され若狭湾沖に沈む旧日本海軍の潜水艦調査「呂 500 探索プロジェクト」に協力し、東陽テクニカが販売するマルチビーム測深機「Sonic2024」を用いて、「呂号第 500 潜水艦（呂 500）」ほか 2 艦の 3D 画像を取得することに成功いたしました。

東陽テクニカは 2017 年にも、ラ・プロンジェ深海工学会が実施した長崎県五島列島沖海域の沈没潜水艦調査「伊 58 呂 50 特定プロジェクト」に協力し、海没処分潜水艦 24 艦の発見・撮影成功に大きく貢献しています。



**海底に着座する「呂号第 500 潜水艦（呂 500）」の 3D 画像**

（ラ・プロンジェ深海工学会 提供）

第二次世界大戦では旧日本海軍は多くの潜水艦を乗組員と共に失い、終戦時に日本国内に残された潜水艦は僅か 49 艦（ラ・プロンジェ深海工学会調べ。解体処分/触雷沈没は含まず）で、それらも全て連合国軍総司令部（GHQ）により海没処分されています。

そのうち、舞鶴港で終戦を迎えた 3 艦（呂 500、伊 121、呂 68）が若狭湾沖に沈められていることが文献や漁業従事者からの聞き取り調査でおおよそ明らかとなったため、2018 年 6 月 18～21 日まで探索・調査を実施。今回のマルチビーム測深機「Sonic2024」による 3 艦の沈没位置特定と発見、それに続く ROV（有索遠隔操作型無人潜水機）を使用しての映像による艦名特定につながりました。

マルチビーム測深機は、港湾土木工事の ICT 化である“i-Construction”に必須の最新の海洋調査機器で、海外においても港湾浚渫調査や戦艦「武蔵」などの沈船探索調査に用いられています。

今回の調査に用いられた「Sonic2024」は、小型漁船などに容易に取り付けることが可能で、五島列島沖沈没潜水艦の調査においても沈没位置特定に活躍しました。

東陽テクニカは、これまでにサミット警備や海底遺跡調査、津波遭難者捜索などに協力してまいりました。今後も、海洋調査機器の輸入・販売だけでなく、機器の運用・データ解析までをサポートすることにより、社会に貢献し続けてまいります。

★ 本件に関するお問い合わせ先 ★

株式会社東陽テクニカ 海洋計測部

TEL : 03-3245-1243（直通）

E-mail : [ocean@toyo.co.jp](mailto:ocean@toyo.co.jp)

「Sonic2024」サイト : [https://www.toyo.co.jp/kaiyo/products/detail/rts\\_sonic2024](https://www.toyo.co.jp/kaiyo/products/detail/rts_sonic2024)

※本ニュースリリースに記載されている内容は、発表日現在の情報です。製品情報、サービス内容、お問い合わせ先など、予告なく変更する可能性がありますので、あらかじめご了承ください。

※記載されている会社名および製品名などは、各社の商標または登録商標です。